

「一家の人々」は、一九五〇―六〇年代、多くの若者たちを魅了し、何度も版を重ねることになる。

学校当局も、ただちに仮校舎を求めて動きだし、牛込区市ケ谷の陸軍士官学校の一部を借り受け、震災からちょうど二か月後の十一月一日から早くも授業を再開した。そして、五か月後の一九二四年三月三日、かつて文部省のあった麹町区竹平町一番地（現・千代田区一ツ橋一丁目、毎日新聞社のあるところ）に、突貫工事によって仮校舎ができた。この年の新学期は、この仮校舎で開始された。この建物は、当初は夏休みまでの間だけ使用することになっていた。極めて安普請であった。しかし、現実には、一〇年以上も使うことになる。

なお、一九二四年五月一日、豊多摩郡野方村大字上高田新井前一―四番地に学寮を新設して、地方からの生徒たちの宿舎とした。これも、大震災により多くの生徒たちが罹災したと無関係ではない。

この大震災は、外語のみならず、首都にある多くの大学・学校にも大打撃を与えた。かつて外語の本校であり、大震災の三年前に大学に昇格したばかりの東京商科大学は、武蔵野の奥深い国立へ移ることを決め、一九二七年秋から同地に移り、一九三〇年に移転を完了する。

五 危機の時代の東京外国語学校

1 危機の到来と東京外国語学校

危機の時代

昭和は、その幕開けから危機の様相を呈していた。長らく病気を煩っていた大正天皇が一九二六（大正十五）年十

二月二十五日に四十七歳で崩御し、摂政宮裕仁が踐祚した。昭和元年はわずかに一週間しかなかった。明けて一九二七年、三月十四日の衆議院における片岡藏相の失言が、全国の預金者たちの払い戻しを誘発して金融危機にまで発展し、ついに若槻内閣の総辞職となる。後を襲った田中内閣の蔵相高橋是清は、三週間の金融モラトリアム（支払猶予）と二億円の非常銀行融資を實行してこの危機を乗り切った。高橋は、軍部の理不尽な予算増額要求を一貫して拒否したことから、二・二六事件では殺害されるが、理論と行動力のともなった政治家として、今日でも高い評価をうけている。とはいえ、脆弱な基盤の上に立つ日本経済は、このときこそ一時的に危機を回避できたものの、やがて襲ってくる本当の危機には、立ち向かうことができなかった。

一九二九（昭和四）年十月にアメリカの株価の大暴落に始まる世界恐慌は、またたく間に日本をも飲み込んでいく。当時の日本経済の基本は養蚕・製糸・織物業によって支えられており、輸出品の約四割は生糸・絹織物であったが、輸出先の九割はアメリカであった。しかし、アメリカの恐慌によって輸出が激減したために、日本経済は壊滅的な打撃を受けることになる。今日ではやや古くなった言葉であるが、「アメリカ経済がくしゃみをする」と日本経済が風邪をひく」という図式は、すでにこの頃からできあがっていた。

アメリカがルーズベルト大統領のニュー・ディール政策によって打開したような復元力のない日本は、近隣諸国を取り込み、膨大な物的・人的資源を支配下に入れることよって乗り切ろうとした。一九三一年九月の柳条湖事件に始まる満州事変は軍部の独断専行によって始められたものであるが、やがてそれは一九四五年八月の敗戦まで続き、アジアの多くの人びとに多大の被害を与えていくことになる。その間、日中戦争（一九三七年七月―）、太平洋戦争（一九四一年十二月―）を含む一五年間の戦争については、今日の歴史学界では、「アジア太平洋戦争」という言い方をすることが一般的となっている。

国民のなかには、恐慌に対して有効な対処を打ちだせなかった政党政治家たちに失望し、軍部に期待を寄せるものも少なくなかったが、軍部は五・一五事件、二・二六事件を経てやがて支配権をにぎっていき、中国戦線の拡大につれて、「非常時」が平時化され、国民は総力戦体制の中に巻き込まれていくことになる。最終的にその体制は、一九四五年八月十五日の日本の連合国への無条件降伏によって崩壊するが、恐慌から戦争へと続くこの昭和前半は、明治以来の近代日本が体験した未曾有の危機の時代であった。

修業年限四年制とその問題点

東京外国語学校の修業年限四年制がスタートするのは、まさにその混乱の昭和が始まった一九二七（昭和二）年の新学期からである。新しい「東京外国語学校規程」による学科目および週間時間数は表8の通りである。なお、この年から朝鮮語部は廃止された。

修業年限が一年延長されたことにより、授業時間は三〇時間以上増えた。

これによって、八年前に三科に分かれ、各科の専門の授業が加わったことにより減少を余儀なくされた各部の外国語の授業時間は回復された。またいっぽう、三科に固有の授業も多少増えた（なお、三科のうち文科は、選択科目のとり方によっては、法学系と文学系のどちらかに力点をおいて履修できるので、入学後、さらに文科と法科とに分けられた）。

しかし、修業年限は一年しか延長されなかったもので、本来の外国語学校のあり方を取り戻すという側面は重視されたが、各科の充実という点は軽視された形になった。例えば、貿易科といっても貿易事情はわずかに二時間しかなく、また拓殖科における植民地事情もやはり二時間に過ぎない。また、三科に分かれてはいるものの、共通の学科目が八

表 8 東京外国語学校正科学科目および週間時間数(4)

1927 (昭和 2) 年 3 月改正

科	文 科				貿 易 科				拓 殖 科			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
学 年	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
修 身	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
外 国 語	20	17	17	15	20	17	15	13	20	17	15	13
第二外国語		2	3	3		2	2	2		2	2	2
国 語	2	2	* ₁ 1	* ₁ 1	2	2			2	2		
経 済		2		* ₂ 2 * ₃ 2		2		* ₃ 2		2		* ₃ 2
法 律		* ₂ 4	* ₂ 7	* ₂ 5			7	4			5	2
教 育 学				* ₁ 3 * ₃ 3			* ₃	* ₃ 3				* ₃ 3
歴 史	3			* ₂ 2 * ₃ 2								
言 語 学			* ₁ 2	* ₁ 1								
文 学 史		* ₁ 2	* ₁ 2									
哲 学 史	2	* ₁ 2	* ₁ 2	* ₁ 2								
社 会 学				* ₁ 2 * ₃ 2								
商 業					2	2	3	4	2	2		
商 業 実 務					3	2		2				
貿 易 事 情							2					
農 業								3	2	3	5	
植 民 地 事 情										2		3
体 操	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
計	30	30	30	30 * ₃ 4 又は 5	30	30	30	30 * ₃ 2 * ₃ 5	30	30	30	30 * ₃ 5

[備考]

- 支那・朝鮮・蒙古・暹羅・ヒンドスタニー・タミル語部は、外国語を 2 種に分け、甲（当該国語）、乙（必要な他の外国語）とし、その時間配当は別に定める。
- 外国語の時間内に、当該国語、または甲乙当該国語以外の言語を教授することもある。
- 第二外国語は、英語・仏語・独語の中より 1 つを選択する。ただし、途中変更は許さない。
- 文科中の *₁ および *₂ の学科目は、同一学年内のうちから、どちらかを選択する。
- 各科中の *₃ の学科目は、随意科目とし、希望の生徒が受講する。
- 支那・蒙古・暹羅・ヒンドスタニー・タミル語部は、第二外国語および文学史またはその 1 つの代わりに、甲乙外国語または他の学科目を配当することができる。
- 「昭和 2 年 文部省令第 2 号」（『法令全書 昭和 5 年』 8～9 ページ）より作成。

割前後を占めていた。このように、新しい規程の下に出発した東京外国語学校ではあったが、その特色が十分に発揮されたとは言いがたかった。五年制の要求が実現しなかった結果であるといってしまうばそれまでだが、専門学校である限りは、やむをえない限界であったかもしれない。

しかしながら、一九二〇年代の終わり近くになって、次第に官立のみならず公立も含めて単科大学が次々と生まれ、さらに私大の昇格が相繼ぐと、かつては専門学校トップに位置づけられていた東京外国語学校は、急速に相対的な地位を下げていくことになる。ただ、それに気づいたときには、すでに昭和恐慌の嵐が吹き始まりつつあったときであり、国家財政の逼迫によって、大学への昇格はほとんど問題にならなくなっていた。そして、一九三〇年代に入ると、その道は全くとざされる。第一次世界大戦の末期から一九二〇年代初頭にかけて、国家が大学昇格をめざす政策をとっていた時期に、バスに乗り遅れてしまったツケが、この時になって具体化するのである。

「大学は出たけれど」の時代の外語

外語の危機が深刻化するのには、昭和恐慌が激しくなってきたからである。小津安二郎の松竹映画「大学は出たけれど」（一九二九年九月封切）は、芸術家の感性が時代を先取りしたものであるが、一方では、明治期には大学と言えば四つの帝国大学しかなかったのに、一九二〇年代に入ってからその数が増えて、「学士サマ」の安売りが始まった状況を皮肉った作品であった。しかし、この映画がまさに上映されている最中にアメリカでの株価の大暴落があり、それが間もなく日本にも襲ってきて、このコピーは、俄然、現実味を帯びてくる。学生の厳しい就職難の時代がやってきたのである。大学ですら、そうした状態になりつつある時、専門学校に過ぎない外語が、そうした時代の影響を受けずに過ごすことはできなかった。

そもそも、東京外国語学校の卒業生の就職率は、それほど高いわけではなかった。例えば、大阪府庁外事課に勤務していた露語科の卒業生の島崎愛之助は、「偶感」(東京外語露西亜会「会報」第六号、一九二八年七月)で、次のように書いている。

毎年のことではあるが、本年も東京及大阪の両外語校で、卒業生の就職運動がある。両校共各語科の中でも、露語科が一番悲惨な状態である、外務省の通訳生か書記に合格するか、合格者を除いては薩張り捌け口がない。(中略)日露協会の出身者も京阪神地方に溢れ来て、ソヴィエト領事館のボーイ代りや、百貨店の客引のやうな務をして居る。東西両校の唯一の頼みとして居た北満進出は絶対不可能ではないが、なか／＼困難である。(中略)大阪外語校の出身者も、亦た其職を求むるに実に悲惨で、税関の監視人や、随分優等成績の卒業生でも巡査になってゐるものもある。従来我母校の出身者の中で書記から鰻上りに登つて領事となつたのが成功第一位であらう。其外是れたる成功者を看ない。我露語科のみと限らない。他の語学科の卒業生でも、有為転変的な地位に在つて、一旦失職すれば後日就職するに、非常な困難と努力が要る。

確かに露語部出身の者は、ロシア革命が起こつてから、身につけた語学力を生かす道は少なくなつた。しかし、島崎が言うまでもなく、露語部出身者に限らず、外語の卒業生が、その身につけた能力を十分に生かしているとは、とても言えなかつた。

だが、それでも恐慌の前はまだよかつたのである。一九三〇年以降になると、就職状況はさらに悪化する。東京市は一九三一年四月、東京市知識階級職業紹介所を小石川などに開設したが、それはやがて急速に増えてついに市内で三〇か所になる。

こうした時代の荒波は当然、外語をも襲つた。その中で、英語部は最も就職口が多かつた。だが、その英語部ですら雲行きがあやしくなつた。そのことを示す一つの出来事がある。実は、一九二六(大正十五)年四月の新学期から、

第十二臨時教員養成所が設けられていた。修業年限は三年で、初年度は三五人が入学した。臨時教員養成所は、全国各地の大学・師範学校などに置かれたもので、教員の不足に対応するためのものである。外語に置かれたそれは、中等教育の発展に対応して英語教員の養成を主たる目的としたものであり、英語の免許だけを授与するものであったが、本科英語部と区別するために臨教部と呼ばれた。その臨教部が、一九三一年三月二十六日をもって廃止されたのである。これは、昭和恐慌の影響で就職率が低下したと関係がある。もともと、外語の卒業生には、英語の教員になるものが少なくなかったが、恐慌の進展とともに臨教部の存在は本科の生徒の就職口をおびやかすようになっていた。そこで、共倒れを防ごうとしたのである。というよりは本科生を守るための処置であったと言える。

就職難の時代になると、どの学校を出たかが大きな決め手となる。しかも、不景気の中で、単に就職率だけではなく、給料にも大きな差があった。「中央公論」一九三〇年七月号には、まだ新進のジャーナリストであった小汀利得による「初任給調べ」という記事が載っている。当時は、不況の始まったばかりであるが、「大学は出たけれど」の状況が始めつつあり、理工系学生に比べて、文系の就職率は半分ほどであった。さて初任給であるが、その一部を引くと、三井信託銀行は慶応・商大・帝大が月額九〇円（半期三か月の手当）、早稲田が八〇円であり、横浜正金銀行は帝大・商大が五九円、早稲田・慶応・官立高商が四五円、他の私大が三五円、六年生甲種商業が三〇円、五年生甲種商業が二六円である。銀行の中で、いちばん格差のない三井銀行でも、大学令による大学七五円、専門学校令による学校が六五円としていた。また、住友財閥系会社は、帝大・商大が八〇円（一年四・八か月分の賞与）、早稲田・慶応が六五円、地方商高が六〇円、中等学校が三五円となっている。

これを見ると、就職先によって差があるものの、大学・学校によってかなり明確な違いがあることが歴然としている。残念ながら、ここには東京外国語学校は出ていないが、専門学校である限りは、高くても高商並みであったと思

われる。一九二〇年代にかなりの私学が大学に昇格し、それらの評価には、早・慶を除くと官立大学との間に大きな違いがあったものの、大学はやはり大学であった。いっぽう外語からは、明治以来、多くの優秀な人材が輩出してきたが、専門学校であるために、大学および各種高商の下にあまみじなければならなかった。

外語批判

東京外国語学校は、かつて関東では、帝大、高商・高工の二つの実業専門学校、千葉医専、高等師範につぐ位置づけをされていた。しかし、それらがすべて大学に昇格したのみならず、多くの私学大学部が大学を名乗ることが許されていく中で、その地位は相対的に低下していったが、恐慌という時代の荒波は、外語をさらにいっそう深刻な危機に陥れた。

このような事態に直面した中で、文芸部の編集になる校友会機関誌「炬火」第一四号（一九三二年三月）はタイムリーな「外語批判」の特集を組んだ。これはなかなか勇氣ある企画であり、文芸部の姿勢は評価すべきであろう。いかなる場合でもアプリアオリに母校を盲目的に愛し、それを批判する者を、たとえ建設的な意見であっても、激しく論難する人たちが常に存在する中であつて、それを冷静に見すえて自省しようしているからである。もつとも、このような企画が組まれたということは、当時の外語の危機がそれだけ深刻であつたことを示しているとも言える。

この特集を組んだのは、すでに恐慌が猖獗を極めていた時であり、それだけに、各論に共通しているのは、時代に対応できないでいる外語への批判である。言い換えれば、危機に有効な対処のできない外語の危機への苛立ちと言つてもよい。例えば、「もがき生」は、図書館のあり方を組上にあげているが、彼が問題にしているのは、館員の不親切、カードの分類のデタラメさ、建物の汚さだけではなく、「古典の部類に属する、某全集何全集の多くてその割に

本が一般的になつてゐない事」、つまり「ゲーテ研究者にとつてはゲーテ全集を十通り位備えて悦に入るのも有難い事には違ひないけれども、一般人には甚だ迷惑」なことであり、「現代の青年の氣持を殆ど御理解にならなかつたりする」ことである。

ここにあるのは、具体的現実そのものに対する青年の強い知的欲求を満たしていない図書館への不満であるが、同種の批判は学校そのものにも向けられている。「外語批判」というそのものズバリのタイトルを付けた杉田幹雄の文章は言う。「外語は形式があつて、内容のない存在である。」「文科だの、法科だの、貿易科だの、拓殖科だのと、立派な名はあるが、此れも内容のない、形式ではなからうか。」すなわち、科に分かれはしたものの、実際にそれが形だけであつて、内実は旧態依然たるものに過ぎず、いつたいいかなる生徒を育てようとしているのか、「語学があつて、思想がない」学校への批判である。野沢一「外語生活の一考察」も、「某省に於て本校生徒の採用試験を行ひし時蔣介石とは如何なる人物なりやとの問ひに対し解答する事能はざるものありき」という例を挙げている。

現実に対してほとんど有効性をもたなくなつてしまつた外語の状況を、平尾省一「外語」に対する一史的考察」は、「六十の老爺は遂に動脈硬化に侵されたのではないだらうか」と述べ、「この動脈硬化症患者の道連たる事を一日早く見限れば見限る程、云ひかへれば、現在の学制を一日早く見限れば見限る程、吾々の「外語」はその史的生命を長くするのではないだらうか。それともこの御老体にずるとひつゝ、いて野垂死するのが「孝」と云ふべきなのか。」と厳しく突き放し、最後には「外語」は今や大きな十字路に直面してゐる」と結んでいる。

外語が創立以来、有為な人材を供給してきたことは事実である。しかし、学校のあり方を根本から検討し、変えようとする努力をほとんどしてこなかつた。一九二〇年代までの安定と発展の時代ならば、語学中心のあり方でもよかつたかもしれない。しかし、危機の時代にあつて、何らの有効な手立てをとれずにいる現実、生徒から見れば「動

脈硬化症患者」としか見え、その将来には「野垂死」があると思えなかつたのかもしれない。

このようにして、恐慌のために就職率が下がり、しかも大学との格差が歴然と開いてしまった状況下に、外語のあり方へのかなり根本的な批判が出されてきたのである。

ただし、事実はずねに相対的なものである。外語には、この頃もまた、かつての校名存続運動のヴァリエーションとして、語学派と実学派という形の対立・内訌を繰り返していたのかもしれない。そして、これらの批判は、恐慌期における実学派からの語学派批判であるということもできよう。

しかしながら、歴史は将来を見通す鏡である。その中には未来が映し出されている。外語が現実に対して有効力をもたなくなってしまった原因にはいろいろあるが、その主要なものが、殖民貿易語学校となることを拒否した結果、実業専門学校となる道が閉ざされてしまい、大学昇格の可能性を失って、結局は中途半端な三科・四年制とならざるをえなかつたことに起因していることは明らかであった。

実は、そのような外語をもたらししてしまった最初の原因である校名存続運動に対する反省は、すでに以前から出ていた。前述の島崎愛之助「偶感」(一九二八年)は、校名存続運動についての福岡秀猪教授(国際公法)の意見を紹介して、次のように書いていた。「福岡先生の改善意見は、外国語を中心とする単科大学に昇格することである。其当時各専門学校はどしどし昇格したのであるから、我母校は必ずや昇格出来たのであらうと思はれる。私人の意見は昇格しなくともよいが、母校を根本より改善するに在る。前村上校長が殖民貿易学校と改称せられんとしたるは、先見の明あつたのである。然るに卒業生達が騒ぎ立て、其名案も画餅に帰したのである。」

校名存続運動が起こつてからすでに一〇年以上もたつてからの発言であるが、かつては外語の元凶であるかように言われた村上校長に対して、外語の地盤沈下という状況の中で、再評価の声が上がつたのである。もっとも島崎は、

さらに福岡の意見として、村上元校長は名校長ではあったが、東京帝大出身の教授を重要視したために、旧外語および母校出身の教員たちの反感を買ったのだということも付け加えている。

ただし、繰り返しになるが、恐慌の時代に入ってから以降敗戦までの間に、官立大学に昇格する可能性はゼロに近かった。国家の慢性的な財政難と極端に肥大した軍事費は、文教予算を極めて貧しいものとしたからである。そのよくな中では、生徒たちの意欲的な外語批判も現実とはなりえなかった。結局、外語の教育体制はそのまま、戦争末期の一九四四（昭和十九）年四月に東京外事専門学校となるまで続いていくことになる。

「外語批判」の特集の最初に文章を載せている福元一夫は、外語のある教授の言葉を紹介している。「外語の文科や法科を出た所で帝大の文科出や法科出にかないつこはないし、貿易科や拓殖科出は商大出にはかないつこはない。」少なからず自嘲めいたこの言葉は、おそらく戦前の外語の現実であったであろう。しかし、帝大を東大に、商大を一橋大に置き換えれば、この言葉が戦後にも通じるところに、歴史の刻印の深さがある。

なお、一九三二（昭和七）年八月四日、長屋順耳校長が学習院長となったことから、弘前高等学校校長の戸沢正保が後任の校長となった。戸沢は、シェークスピアの研究者として知られ、戸沢姑射の名前で浅野馮虚（和三郎）と共訳して出した『沙翁全集』全一〇巻（一九〇五―〇九）は、日本におけるシェークスピア研究の歴史に残る偉大な事業である。

2 ファシズムと戦争の嵐の中で

語劇大会の廃止

外語の伝統であった語劇が、一九一九（大正八）年に語学大会として復活したことは前述したが、その語劇が再び一九二九（昭和四）年に中止された。これもまた、政治と関係が深いことである。その年の七月、政友会の田中義一内閣が総辞職し、代わって登場した民政党の浜口雄幸内閣は、その目玉の一つに「緊縮」を挙げており、そのことから語劇も自粛を余儀なくされたのである。ただ、それ以前より語劇はいつしかまたまた華美になり、そのために一九二六年には、文相の方針で、扮装がいつさい禁止され、制服・制帽のまま芝居をしたこともあったほどであった。しかし、それは非常に不評であったので、翌二七年、幸い内閣が変わったこともあり旧来のものに戻っていたのである。

二九年は、語劇が中止されたことから、その代わりに旧来もその一環として小規模ながら行われていた国情展覧会を、十一月九・十日の両日、大々的に挙行した。国情展覧会というのは、創立二十五周年記念行事のところでも述べたが、各語部がそれぞれの国の実情を表わす統計・図表類、政治家・思想家・芸術家の肖像画、地図・地形図などを展示する企画である。この年の大会は、これがメインであったから、各部とも趣向をこらした。例えば、独語部では飛行船ツェッペリン号の模型を作り、西語部では当時まだ貴重品であったレコードを五〇枚も用意してかけ、それぞれ好評を博した。また、露語科では、雪におおわれたロシア農民の家を建て、照明によって夕暮の風景を示した。こうした形式の展覧会は、当時それほど珍しいものではなかったが、その内容がいかに外国語学校らしかったので非

常に盛況であり、二日目は雨天にもかかわらず入場者は多かった。

しかしながら、語学大会が中止されたことを残念に思う者は少なくなかった。誰よりも生徒自身が、年によつては春頃から準備することすらあつた語劇が中止されたことに強い不満をもち、その復活を強く希望した。教員たちも伝統ある行事がとぎれたことを悲しむとともに、生徒たちに衷情を覚えて、華美になりすぎること心配しつつも、それを支援した。その結果、翌年に復活して、またしばらく続けられていくことになる。しかも、一九三〇年以降は、明確に語劇大会と呼ばれるようになった。本来、語学大会は、演説や朗読などいろいろの出し物があつたが、語劇だけになつたので、そのように呼んだのであろう。ただし、語学大会といっても、中心は語劇であつたから、従来でも語劇大会とも言われることがあつたようである。呼び方はどうあれ、外語にとつての名物的な行事が続けられたことの方が意義あることであつた。

しかしながら、その語劇大会もまた一九三六（昭和十一）年十一月十四・十五日の公演を最後として開かれなくなる。時局が、その開催を許さなくなつたのである。念のために、戦前では最後となつた語劇大会の出しものを記しておこう（『外語同窓会誌』第二七号、一九三七年一月一日）。

第一七回語劇大会プログラム

昼の部（午後一時）

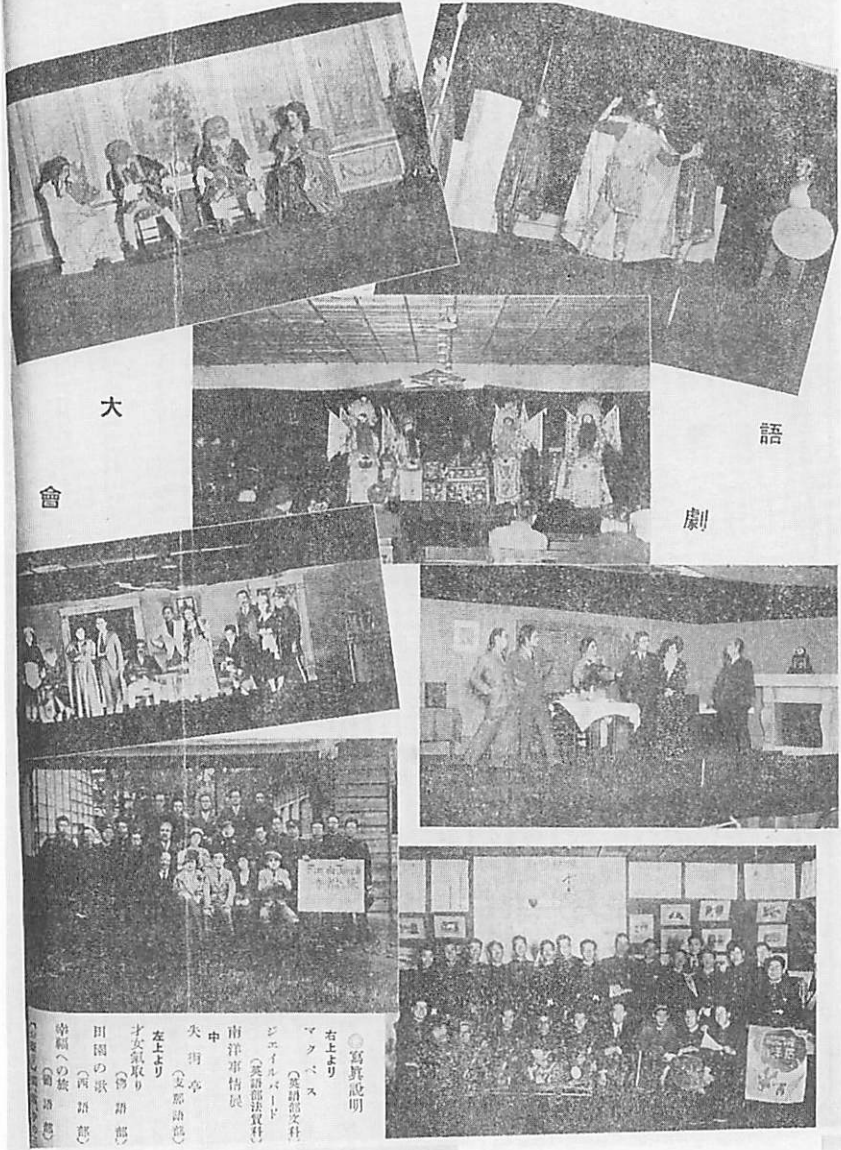
開会の辞

一 ハムレット・イン・ヴィツテンブルク

（ゲルハルトハウプトマン作）

二 さらば青春

独語部



大
會

語
劇

● 寫眞説明
 右上より
 マクバヌ (英語部女性)
 ジョエルバード (英語部男性)
 南洋事情展
 中
 矢野 幸 (支那語部)
 左上より
 才女氣取り (英語部)
 田國の歌 (英語部)
 幸福の旗 (英語部)

最後の語劇大会。1936 (昭和11) 年11月14、15日 (『外語同窓会誌』第27号、1937年1月1日)

(サンドロ・カマズイオ、ニイノ・オキスイリア合作)

伊語部

三 ポリス・ゴドウノフ(プーシキン作)

露語部

四 幸福への旅

葡語部

五 マクベス(シェイクスピア作)

英語部文科

夜の部(午后六時)

一 才女気取り(モリエール作)

仏語部

二 失街亭

支那語部

三 田園の歌(キンテロ兄弟作)

西語部

四 ジイエルバード(ジョン・ブローケンシャー作)

英語部貿易科

一九三七年に語劇大会が中止されたのは、同年七月に盧溝橋事件が起こり、それが日中戦争として拡大していったためである。同年八月、国民精神総動員実施要綱が決められ、さらに翌月からは、「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」を三目標とする運動が開始された。そのように国民生活が戦争に向けて集中されていく時期であれば、語劇どころではなかったであろう。最終的には学校長の判断で中止された。

翌三八年になると、事態はさらに深刻化していった。同年二月、国民精神総動員中央連盟は、国民に向けて「家庭報国三綱領」を出したが、そこには国旗掲揚、国債応募などとならんで、服装の簡素化、物資節約と廃物利用、徒歩励行とラジオ体操奨励、禁酒禁煙など「実践一四項目」の実践などが掲げられていた。そして、同年四月、国家総動員法が公布されて、「非常時」という言葉が恒常化する。

しかし、それでも生徒たちは語劇大会の復活をめざして、学校側と何度も交渉した。一九三八年四月に、四年生一同が提出した要望書には、「対外的にも対内的にも語劇の永き伝統と先輩の業績に生きることが我々の使命であるこ

と」「語劇は四年間の我々の語劇研鑽の有力なる発表機関であること」「外語の誇りの一つは語劇であり、卒業後の大きな想ひ出となること」など八項目が書かれ、さらにその実行方法として、「我が国未曾有の非常時局に際会しまして国民精神総動員の下に、長期戦の真精神を旨として学生の本分に従」うことなど三項目が書かれていた（浅野豁「語劇問題の経過報告と私見」、『炬火』第二七号、一九三八年六月）。

学校側も、生徒たちの切実な願いを何とか実現させたいとは思ったが、現実それが不可能であることは歴然としていた。そして、「語劇はあくまでも語学大会の一つの方法に過ぎないのだから、他の形式も考えてはどうか」と提案したが、生徒たちにとっては、語劇のない語学大会は無意味であった。そして、結局、この年もとりやめとなった。右の浅野豁は、「戦争をしてゐる時に芝居でもあるまい、と云ふ極めて常識的な而も粗雑ではあるが強力な社会通念の圧力が我々から語劇を奪つたとも云へる」と書いている。『外語同窓会誌』第四九号（一九三八年十一月一日）には、「語劇取止め」という見出しで「本年も母校名物語劇大会は取止めと決定した」とある。本年もとあるのは、前年に引続いてという意味である。こうして、戦争はついに外語の外語たる名物行事を中止させたのである。語劇は、やはり外国語学校が誇る平和な時代の祭典であった。

このように、いくつかの史料からは、それが一度は禁止されたことは明らかである。しかし、次の「東京外事専門学校」の項で触れるように、語劇大会は、アジア太平洋戦争末期には行われていたようである。しかし、それはあくまでも学内だけの行事であり、しかもその上、制服をつけたままでの演技であったという。それがいつ復活したのかは明らかではないが、何らかの理由によってそれが、再び行われるようになったものと思われる。

外語の伝統として知られた対外的な公開行事としての語劇大会はなくなったものの、校友会のなかの語学大会部という組織はその後も残っていたことも事実である。そこには、生徒たちの復活にかける想いが込められていたと言え

よう。その語学大会部が主催して、一九三八・三九年に映画会を開いている。語学大会に代わる催しとして開かれたものと思われる。映画会は生徒たち自らが演じる語劇とは無縁なものであったが、それが当時にあつて生徒たちなしうる最大の行事であつたのであろう。しかし、その映画会も、開かれたという記録が残っているのは、この兩年だけである。

本格的な意味での語劇大会が再び蘇るのは、敗戦後の一九四六年である。そして、現在、語劇は、毎年の秋の外語祭において中心的な企画として行われている。それが、外語の長い伝統ある行事として、いつまでも続いてほしい。と同時に、それがたどつた苦難の歴史と先人たちの哀しみを、現在の若者たちにも、ぜひ知ってほしいものである。

文芸講演会

対外的にも有名であつた語学大会は、日中戦争の開始とともに中止されたが、校友会の文芸部が主催する文芸講演会は、その後も続けられていた。ただし、これは校内の生徒のみを対象としたものであり、学校そのものがかわつていたわけではない。いつの頃から始まつたのかは明らかではないが、「炬火」に載っているものだけを挙げると、次のようなものがある。前半のものは、春期文芸講演会・秋期文芸講演会というような名称であるが、一九三八年五月十四日のものは第三回となつているので、おそらく前年から回数を入れるようになったと思われる。

一九二八年秋期 十月 七日

辰野豊

文学と科学

一九三二年春期 四月 二十二日

長谷川如是閑

現代ジャーナリズムの傾向

谷川徹三

ゲーテ百年祭に際して

一九三八年	五月十四日	第三回	本田喜代治	バルザックとフランス文学に就いて
一九三八年	十一月二十日	第四回	谷川徹三	西洋と東洋
一九三九年	六月十日	第五回	大槻憲二	青年の悩み
一九三九年	十月十二日	第六回	阿部知二	題名不明
一九三九年	六月一日	第七回	三木清	題名不明
一九四一年	五月二十四日	第九回	伊藤整	題名不明
一九四一年秋		第十回	高見順	題名不明

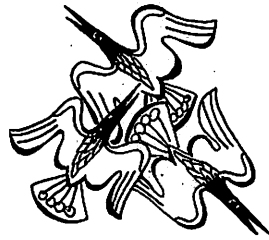
「炬火」に載っているのはこれだけであるが、講師や内容において、前半と後半との間に質的な違いは見られない。雪崩を打ったように戦時へと向かっていく状況の中にあつて、時局に迎合することなく自らを買いた文化人たちが並べられている。エロ・グロ・ナンセンスという言葉が生まれた時代、そして「新体制」になびくオポチュニストたちが急増していった時代にあつて、このような講師の人選をしたその眼の確かさは、評価されるべきであろう。

「炬火」は年二回発行されたが、そこには、論文・創作・翻訳・詩・短歌などのほか、校友会所属の各部（サークル）の紹介や、語劇の批評、文芸講演会についての報告などが載っている。「炬火」という雑誌名は、いうまでもなく校章からとつたものである。

その誌面には、時として教員たちの文章も見られるが、主役は言うまでもなく生徒たちである。そして、そこには、激動の時代を生き抜こうとするこの時期の青年たちの真摯な息吹きと、真なるもの・善なるもの・美なるものを求めて彷徨するいつの時代にも変わらぬ青春の魂とが入り交じり、種々の文様を織りなしている。そして、時として見られる稚拙な表現を越えて、彼らの訴えようとしていたことが、ひしひしと胸に伝わってくる。

火炬

33



東京外国語学校図書編輯部

文化文藝班編輯

「火炬」機関部文芸

例えば、第二九号（一九三九年六月）のブック・レビュー

ユーでは、羽仁五郎の「ミケランジェロ」が取り上げられているが、そこには次のように書かれている。「新しい進歩的な立場にたつたものこそ古典を真に理解し、うけつぐ事が出来る。決して現状に満足せず、いわゆる独善的な自己肯定的な安心の境地ではなく、絶えずよりよきもの、つねに高きものを求める進歩的境地である。」

そして、波乱に満ちたミケランジェロの生涯を紹介した後、文章の最後をこう結んでいる。「著者は斯くミケランジェロ、死闘せるフイレンツエ、然かも敗北していく二七―三〇の自由都市の姿を描くの力を注いでゐる。」羽仁五郎がミケランジェロを通して語つたのと同じように、この文章の筆者「K氏」もまた、この文章を通じて、自らのうちにあるものを表わしたかったのであろう。そこには、「新体制」「新秩序」が叫ばれる時代にあつて、自らの守り続けていこうとする知性の叫びを感じることができる。

鶏舎式校舎から西ヶ原の新校舎へ

関東大震災の半年後の一九二四年三月に麴町区竹平町一番地に建てたバラックの仮校舎は、もともと夏休みまでの五か月間だけ使う一時的なものではなかつた。しかし、当初予定していた小石川造兵工廠跡地は、地盤が脆弱で校舎を建てるのには無理だと分かつた。次に候補に上がった御茶ノ水女子高等師範学校の跡地も、すでに他校が建て

られていたので、残った土地にさらに一校を建てるのに狭すぎるといふことで、結局、竹平町に一〇年以上も居続けることになってしまったのである。もともと安普請でしかなかったところに、一九三四年秋に風水害が襲って、さらに惨めなものとなった。土台は痛み、床下の用材が腐り、廊下を歩けば振動が激しい。教室や柔剣道場では、雨もりするだけではなく、天井が落ちることすらあった。休みになるたびに修理を繰り返していたが、それでも消防署から「出火して五分で全焼する」という折り紙をつけられたほどの粗末さであった。そこに加えて、一九三〇（昭和五）年からは、修業年限延長に伴って四年生の分が増えたので、教室が不足していた。

新校舎の建築予算は大震災の翌年には一七〇万円が予定されていたが、やがて次第に削られて、ついには八〇万円にまで減ってしまった。しかし、一九三三（昭和八）年になって、滝野川区西ヶ原の元海軍爆薬部が新しい敷地に決まった。とはいふものの、時期が昭和恐慌の真つ最中であつたこともあつて、校門だけはできたが、周りを塀で囲つただけで、工事は少しも進捗しなかつた。

『外語同窓会誌 第六号』（一九三五年四月一日）第一面には、「SOS!」と題する外語の校舎の現状について次のような文章が載っている。

（前略）希望にもえた青年が官立外国語学校を志望して規則書を取りに来たら門ばかりだつた、玄関を見付けて入つたら真暗黒、これが官立学校かと心が暗くなつた。多分内容も此様だらうと入学を断念したものが無いと誰が断言出来ようか、学校当局も殊に直接教鞭を取らるゝ教官方も現状では完全に授業が出来ぬ、教官室へ帰つて来てても各科雑居、雑然として書見も出来ぬ、さながら芝居の幕合時か市内の盛り場然として居つて講義の時より大声を出さねば談話も出来ぬ、教室へ行けば隣室の講義と混同して気が散つて教授も出来ぬ。殊に第一学期の発音練習期ときたら、取引所の立合ひ四、五ヶ所を一堂に集めた様な有様、往來の人も何事かときゝ耳を立てると云ふ始末、これでは好い生徒も出せはせぬ、早く新校舎が欲しい、

是れ第一のSOS（後略）。

この記事と同じ紙面には、「鶏舎式校舎」と名づけられた当時の仮校舎の写真が載っている。その後方には高くて立派な如水会館が写っているのが、何とも皮肉である。また、講堂内部の写真も載っているが、講内には屋根を支えるために何本かのY字形の柱が立っており、「街路工事場の様な講堂」というキャプションがつけられている。

西ヶ原の新校舎は、一九四〇（昭和十五）年一月にやっと着工し、初夏になって第一期分（木造二階建、延べ三八三坪）が、また四二年三月には第二期分（延べ九七九坪）も終わり、校舎の原型ができた。そして、すでに外事専門学校と校名を変更した後になってからであるが、一九四四年五月に移転する。ただ、すでに戦時時期に入っていたことから、校舎はすべて木造であり、施設なども往時の元衛町のそれとは比ぶべくもなかった。

ところで、この校舎もまた、戦争末期の一九四五年四月十三日、アメリカ軍の空襲で焼失することになる。それにしては外語は、本当に本物の校舎とは縁がない学校である。

日中戦争と東京外国語学校

日中戦争が開始されると、外語の卒業生の中には、一般の召集が本格化する時期よりも相当早くから応召者が出る。そして、犠牲になるものも現われてきたのである。例えば、盧溝橋事件が起こってから間もない一九三七年七月二十九日、早くも宮脇賢之介、甲斐厚の二人の戦死者が出る。宮脇は、支那語学科一九一四（大正三）年の卒業で、大連と山口の商業学校の教員を経て、満州国政府に入り、財政部調査課長などを務めたが、その当時は日本軍の指導の下に北平（北京）東部に作られた冀東自治政府の顧問をしていた。また甲斐は、陸軍士官学校卒業の職業軍人であった

が、一九三四年に東京外国語学校委託生として在籍したことがあり、この時は支那駐屯軍司令部所属の陸軍少佐であった。二人は、冀東自治政府保安部隊が起こした反乱の際に戦死したのである。

この二人の戦死を報じた「外語同窓会誌 第三五号」（一九三七年九月一日）の第一面には、報知新聞上海支局長百武末義（伊語部・一九二八年卒）が、やはり上海事変の際に負傷したことが載っている。また同じ紙面の「本会会員続々応召」という記事には、外語関係者の出征者一七人の氏名が出ており、さらに紙面の最後には「事変応召御氏名をお報せ下さい」と大きく書かれている。その後、「同窓会誌」には毎号のように、応召会員、戦死者、戦傷者の名前が出るようになる。

このように、日中戦争では、早くから出征した外語卒業生は多かった。一九三七年十二月から約四週間にわたって皇軍慰問と教育視察のため「満洲国」・華北・華中を回った宮之内教授（支那語部）は、帰国後、三学期の始業式で三時間半にわたる講演をした。その概要を報じた「外語同窓会誌 第四〇号」（一九三八年二月一日）の記者は、「この講演を通じて最も愉快に感じたのは、支那語、蒙古語、露語部其他英、仏、独各語部の同窓生が各地の最も重要な機関にあつて活躍し外語の為め万丈の気焰を吐いてゐることである」と書いている。

また、卒業後二年にして応召されたY・Aは、「外語同窓会誌 第四六号」（一九三八年八月一日）に、次のように書いている。

会誌に依り始めて母校関係の予想外に多数の出征者あるを知り而も二百名に余るとは全く驚嘆もし力強さを覚えました。平時に於てさへ軍部と密接関係のある外語、増々その面目を發揮せるものと自慢物にして居ります。多数の部隊長、隊長あり鬼隊長あり一介の兵隊有り海軍の〇〇隊長、さては記者あり通訳官あり、全く北支に中支に全支に亘り凡ゆる方面に分れて活躍してゐる母校の会員真に胸踊るものがあります。殊に陸海軍選科の方々が、軍の首脳部（到底吾々の頭の上り得ない

人たちですが)として活躍されてゐるのが鼻高ものと、まるで自分が部隊を指揮してゐるかの様に思へて嬉しくてなりません。多数の先輩諸賢、同窓生、更に遅れて卒業された方々に此の地で話の出来るのを楽しみにしてをります。

このあまりにも率直な言葉から、外語と軍との関係を、そして戦争との関係を、改めて確認せざるをえない。その結果、外語の同窓生からは多くの戦死者を出すこととなり、盧溝橋事件から翌三八年八月までの戦死者は一三名にのぼった。同年十月六日、外語の講堂では、この一三名の英霊を弔うために、「支那事变戦没者慰霊祭」が開かれて、教職員や生徒多数が参加した。

アジア太平洋戦争と外語卒業生

日本の指導者たちは、中国との戦争を短期間に決着がつけられるものと思つていた。しかし、「抗日戦争」にかかる中国民衆の命がけの抵抗により、予想をはるかに越えて膠着状態が長引くと、その原因はアメリカが中国を背後で支援しているからであると判断して、ついに対米開戦を決意する。一九四一年十二月七日(日本では八日未明)、日本軍はハワイの真珠湾を奇襲して太平洋戦争が開始された。また、それとほぼ時を同じくして、英領マレー北部からシンガポールの一帯にかけて攻撃を開始し、早くも一九四二年二月にはシンガポールを陥落させ、さらに翌三月にビルマのラングーンを占領する。かくして、戦線は、アジア・太平洋地域に拡大し、それらの諸国・諸民族及びその宗主国であるイギリス・フランス・オランダをも相手とする戦争となつた。しかし、連合国は、主要な敵国がドイツであつたので、当初のうちはアジア・太平洋地域に力を割くこともできず、各地で日本軍が勝利した。そして、軍政を敷いたり、親日政権を樹立するなど、「大東亜共栄圏」の構築をめざして進んでいった。

広大な地域が日本の支配下に入ると、各地の言語に通じた東京外国語学校の卒業生は、この戦争とさまざまなかたちでかわることになる。ここでは、反国民会議派のインド独立運動にかかわったヒンドスタニー語部出身者の動きを紹介しておこう（以下は田中敏雄南・西アジア課程教授の聞き書きによる）。

一九四二年五月、タイのバンコックのシレパーコーン王立劇場では、インド独立連盟大会が開かれて、そこには各地の運動家たちが集まったが、その中には、ビルマ支部からの参加者二三名を引き連れた石川義吉（一九四一年卒）がいた。石川は、それ以前からマレー、インド工作のために作られた藤原機関や、それが拡大した岩畔機関に関与していた。岩畔機関の政務班長となったのは、高岡大輔（一九二三年卒）である。高岡は、戦後、衆議院議員としてインドの円借款成立とかかわり、政界引退後も日印協会副会長を務めることになる。

石川が滞在中のビルマのラングールには、多くの日本人が駐在しており、商社や新聞社などには、当然ながら外語の出身者もいた。例えば、東京日日新聞特派員木村一郎（ヒンドスタニー語部・一九三四年卒）は、軍のお先棒をかつく新聞記者たちには批判的であつたし、また朝日新聞の丸山静雄（英語部・一九三六年卒）も、記者会見には出ないで黙々と取材を続けていた。丸山は、戦後、陸軍中野学校、インド国民軍、インパール作戦などに関する著述を残すことになる。

翌四三年七月、シンガポールの大東亜劇場（キャセイ・ホール）で開かれたインド独立連盟大会には、長らく外国で亡命生活を送っていたチャンドラヒボース（一八九七—一九四五）が参加した。ボースは、もとは国民会議派議長であつたが、ガンディーらと対立して会議派を除名され、ドイツに亡命していたのである。石川は彼を出迎えるとともに、同日午後を開かれたインド国民軍結成式に際してのボース演説をヒンドスタニー語原稿と英語原稿をつき合わせることもに和訳している。同年十月、日本軍の厚い援助によってシンガポールに自由インド仮政府が作られる。

同年十一月五・六日、東京の帝國議事堂（現・国会議事堂）では、東条英機首相兼大東亜大臣の召集した大東亜会議が開かれた。参加したのは、汪兆銘中国行政院長（南京政府）、張景惠滿州国國務總理、ラウレル・フィリピン大統領、バーモウ・ビルマ首相、ワンワンタヤコン・タイ国首相代理と、自由インド仮政府首班のチャンドラ・ボースである。この会議は親日派首脳会議ともいうべきもので、「大東亜を英米の桎梏から解放して……以て世界平和の確立に寄与せんことを期す」という「大東亜宣言」を採択した。ただ、タイのビブン首相は、国内に反日的な空氣が強いことから、病氣を理由に代理を送った。

ボースは、インパール作戦敗退後の自由インド国民軍の再建や借款などのために、その後も十一月二十九日まで日本に残っていたが、多忙な日程の中で、西ヶ原の外国語学校を訪れて、英語部の大谷敏治教授の通訳により、一年生に対して演説している。

一九四五年になり、各国の反日運動が高揚し、さらにアメリカをはじめとした連合国の攻勢が強まると、日本軍の敗色が濃くなった。そして、「東亜民族の解放」をうたいながらも、実際には欧米列強に代わって日本が新たな支配者になろうとした試みは挫折し、日本人は一挙に敗者の立場にたつことになる。ビルマにいた日本人も、四月になるとラングーン脱出を開始するが、石川はインド国民軍婦人部隊をエスコートして泰緬鉄道によりバンコックまで届けた。

一五年にわたる戦争を通じて、日本軍の死者は約二二〇万人に達し、本土空襲などによる死者を合わせると、日本人全体の犠牲者は約三一〇万人に及ぶと言われている。ここに紹介したのは、アジア太平洋戦争期の外語の卒業生の動向のほんの一部に過ぎないが、外語の卒業生は、東南アジア各地や欧米の言語に通じていたので、この戦争とかかわった者は一般の日本人より多く、したがってその犠牲者の比率も高かったと思われる。ただし、われわれは同時に

また、多くの統計が報告しているように、中国人をはじめとした諸国民・諸民族がこの戦争中にこうむった被害ははるかに大きく、死亡者総計だけでも最低二千万を超えているという事実をも忘れてはならないだろう。

東京外国語学校報国団と勤勞動員

日本人はアジアの諸国民・諸民族に対しては加害者であった。しかし、国内的に見れば、合理的な思考と冷静な判断との欠如した当時の指導者たちによって作りだされた犠牲者でもあった。戦後になってから明らかにされたところによると、太平洋戦争開戦の一九四一（昭和十六）年におけるアメリカの主要物資の生産高は、日本とは比べるべくもなく大きなものであった。例えば、銃鉄は一一・九倍、鋼塊は一二・一倍、銅は一〇・七倍、亜鉛は一一・七倍、鉛は二七・四倍、アルミニウムは五・六倍であり、エネルギー資源である石炭は九・三倍であり、石油に至っては実に五二七・九倍もあつた（国民経済研究協会『基本国力動態総覧』、『近代日本経済史要覧』東京大学出版会、一九七五年）。当時の指導者たちは、これほどの開きのある両国の違いを無視し、「大和魂」という精神力を鼓舞し、「不敗神話」を作りだすことによつて、国民を戦争にかりたてたのである。

東京外国語学校においても、すでに日米開戦の一年前の一九四〇年十二月一日、生徒の自主的な組織として長らく種々の積極的な活動をしてきた校友会は解散させられ、代わつて教職員と生徒からなる報国団が作られた。この組織は、「吾等ハ学行一如ノ理想ノ下ニ師弟相携ヘテ俱学俱進国体ノ本義ニ徹シ自我功利ノ念ヲ去リ一意報公ノ誠ヲ致シ以テ負荷ノ大任ヲ全ウセンコトヲ誓フ」という理念の下に、いくつかの部が置かれた。まず、全体を統轄する中心に総務部があり、旧来の校友会から受けついで各部の中に、勤勞奉仕班、防空訓練班などが新たに設けられ、かつ一人は必ず二つ以上の班に属することが義務づけられた。

総力戦体制の下に、国家財政の過半は軍事費に回されると同時に、主要生産のほとんどが軍需物資となった結果、衣料品・食料品は短期間のうちに欠乏し、ついに切符制までも導入せざるをえなくなった。加えて、労働力の質の最も豊かな二十代・三十代の成年男子の相当数が徴兵されて、農業・工業生産の現場から離れてしまったために、生産力が質・量ともに急落した。それを補うために、坑山や港湾など苛酷で危険な労働には、朝鮮半島や中国から強制連行によって連れてきた八〇万人近くにも及ぶ人びとを充てた。また、国民徴用令による配置がえによって職種の転換を強行するとともに、さらに学徒・女子学生の勤労働員によってそれを補った。しかし、彼らが熟練男子の労働に代わることは到底無理であった。総力戦体制をうたいながらも、そこにあつたのは再生産構造全体に対する顧慮を欠いたその場しのぎの無計画性であつたと言える。しかし、国民は国策としてすすめられるそれらを拒否できなかった。そして、やがて、太平洋諸島を失い出し始めた一九四三年六月、閣議は「学徒戦時動員体制確立要綱」を決定し、本土防衛のための軍事訓練と勤労働員の徹底がはかられていった。そのためこの時期の学生・生徒たちは、この勤労働員によって、平時に比べて授業時間を大きく削られることになった。残念ながら、東京外国語学校も、もちろんこの勤労働員と無縁であつたわけではないが、この時期に関する資料は極端に少ない。

学徒出陣 マニラ湾の夕焼け

文部省は、太平洋戦争が始まる以前の一九四一（昭和十六）年十月、大学・専門学校・実業学校の学生・生徒の在学・修業年限の短縮を決め、この年度の卒業を三か月繰り上げて、十二月にするとした。さらに同年十一月一日、大学予科・高等学校を含めて、さらに修業年限を六か月短縮することになり、次年度から実施するとした。つまり、本来ならば一九四三（昭和十三）年三月に卒業すべき者たちを、四二年九月に卒業させることにしたのである。

大学・専門学校の修業年限が短縮されたのは、いうまでもなく、彼らを兵士として戦場に送りだすためである。実際、四三年十二月二十四日に、徴兵年齢は旧来より一歳早められて、十九歳となる。

それに先立つ同年九月二十二日、「現情勢下ニ於ケル国政運営要綱」が閣議決定され、さらに翌十月二日に「在学徴収延期臨時特例ニ関スル勅令」が出された。それによって、従来は認められていた学生・生徒の徴兵猶予が、文科系には停止された。かくして、それ以後、多くの若者たちが、本を置き、ペンを銃に持ちかえて、戦場へとおもむくことになるのである。

同年十月二十一日、文部省と学校報国団本部の主催で、東京周辺の大学・学校の生徒出陣壮行会が神宮外苑競技場（現・国立競技場）で開かれた。当日、早朝より降った激しい雨はほばやんでいたようであるが、当時のニュース映像を見ると、ゲートル姿の生徒たちは、中秋の冷たい小雨が降り続ける中を水しぶきをあげながら行進し、在校生や女子学生・生徒たちも、長時間スタンドに立ちつづけて、その雄姿を見送っている。この日神宮に集まった出陣生徒の概数は、七七学校・約二万五千人（一説では三万人）、見送りの学生・生徒の概数は九七校（一説では九六校）の約六万五千（一説では五万人）である。このような壮行会は、十一月に全国各地でブロックごとに行われていく。

生徒たちは、それぞれの郷里に帰ってから兵隊検査を受け、陸軍は同年十二月一日、また海軍は十二月十日に入営した。その出陣生徒の中には、東京外国語学校の生徒たちも当然含まれていた。そして、その少なからざる者は、二度と再び故国の土を踏むことができなかった。

瀬田万之助もその一人である。瀬田は、一九二三（大正十二）年、三重県四日市生まれで、一九四一年四月に支那語貿易科に入学した。そして、一九四三年九月繰り上げで卒業し、十二月一日入営した。しかし、その一年四か月後の一九四五年三月七日、フィリピンのルソン島クラーク付近で戦死してしまうのである。満二十一歳であった。ここ

に、瀬田が死の二日前に、郷里の両親にあてた手紙を載せておくことにする。一人の心優しき青年の白鳥の歌に、しばし耳を傾けたい。

この手紙、明日内地へ飛行機で連絡する同僚に託します。無事お手もとに届くことを念じつつ、筆を執ります。

目下戦線は膠着状態にありますが、何時大きな変化があるかも知れません。それだけに何か無気味なものが漂っています。生死の境を彷徨していると、学生の頃から無神論者であった自分が、今さらのように悔やまれます。死後、どうなるか？といった不安よりも、現在、心のよりどころのない寂しさといったものでしょうね。

その点信仰厚かった御両親様の気持が分かるような気がします。何か宗教の本をお送り願えば幸甚です。何派のものでいいのです。何派のものでも帰するところは同じだと思えます。たとえ一時的でもいい、心の平衡が求められればいいのです。

マニラ湾の夕焼けは見事なものです。こうしてはんやりと黄昏時の海を眺めていますと、どうしてわれわれは憎しみ合い、矛を交えなくてはならないかと、そぞろ懐疑的な気持になります。避け得られぬ宿命であったにせよ、もつとほかに、打開の道はなかったものかと、くれぐれも考えさせられます。

あたら青春を、われわれはなぜこのようなみじめな思いをして暮さなければならないのでしょうか。若い有為の人びとが次々と戦死していくことはたまらないことです。

中村屋の羊羹を食べたいと今ふっと思ひ出しました。

またお便りします。このお便りが無事に着けばいいのですが……

兄上、姉上、そして和歌子ちゃんにくれぐれもよろしく。

早々不一

昭和二十年三月五日

瀬田万之助

父上様

母上様

（日本戦没学生記念会「新版 きけ わだつみの声」光文社、一九五九年）

表9は、東京外国語学校の出陣学徒数を見たものである。一九四一年度の入学者たちが、右の瀬田万之助など、一九四三年十二月に出陣した者たちである。この年の出陣者の比率は入学者の八三・三パーセントに当たるが、以後、毎年、漸増し、八四・五パーセント、八八・〇パーセントとなる。これらの中には、在学中の者も含まれているが、最後の一九四三年入学者は、実に一〇人中九人が戦場に赴いたことになる。

全国の出陣学徒の総計は、それぞれの部隊で学生数を必ずしも押さえていなかったために詳しい実数は不明であることから、既刊本の記載も概数だけである。しかもそれはまちまちで、少ないものでは一〇万人、多いものでは一三万人となっている。

そのうち戦没学徒数については、蟻川壽恵が、克明な記録が残っている東京帝大（入隊者数二、八八四名、戦没者数二七九名）と東京商大（入隊者数八二一名、戦没者数七五名）の二例を挙げながら、その割合を出陣者のおよそ九・三パーセントとしている（『学徒出陣 戦争と青春』吉川弘文館・歴史文化ライブラリー、一九九八年、一三七ページ）。そこから推定すると、全国で九千余人から一万二千余人の学徒が、その若い命を失ったものと思われる。

東京外国語学校の学籍簿などにも、戦死者・戦病死者の名は書かれているが、それらの記載は、合計で一九四〇年入学者が三人、四一年入学者が二人、四二年入学者が一人、四三年入学者が一人にしか過ぎない。したがって、それは、学校に届出のあったものだけと思われる。例えば、右の瀬田の名はない。三か年の出陣者総数六九一名を、蟻川の挙げている戦没者比率九・三パーセント参考にして試算してみると六四人となる。しかし、学校の性格上から実

五 危機の時代の東京外国語学校

表9 東京外国語学校出陣学徒数 1941(昭和16)年~1943(同18)年

年 度	41(S16)		42(S17)		43(S18)	
	学 隊	学 隊	学 隊	学 隊	学 隊	学 隊
英 語 部	23	17	30	24	25	20
仏 語 部	27	21	29	23	28	24
独 語 部	28	25	27	23	23	19
露 語 部	35	27	49	42	45	42
伊 語 部	13	13			14	22
西 語 部	27	22	24	17	23	19
葡 語 部	17	14			16	16
支 那 語 部	56	51	53	50	51	45
蒙 古 語 部	19	17			23	22
泰 語 部	19	13	23	19	20	17
馬 来 語 部			21	20		
ヒ ン ド 語 部			22	17		
タ ミ ル 語 部						
合 計	264	220	278	235	268	236

【備考】1 「学」は、入学者数から、退学・除名・死亡者を除いたもの。

「隊」は、入営・入隊・応召・入団者の合計であるが、在学中の者のほか、退学者・除名者（授業料未納などによる）も含む。

2 【東京外国語学校学籍簿】による。

数ははるかに多かつた(二二二ページ参照)。
 かつて、学生・生徒でありながら、本を読みた
 いと思つても読む機会を奪われ、学びたいと思つ
 ても学ぶことの許されない時代があつた。そして、
 その少なからざる者たちは、僅かに二十歳前後の
 若さで、その身をワルキューレの馬の背にゆだね
 てしまったのである。その多くの若人たちの万感
 の想いを、今日に生きるわれわれは無駄にしては
 ならないだろう。

なお、この間の学校について少し触れておくと、
 一九三八(明治十三)年十二月二十二日、戸沢正
 保が六十六歳の高齢をもつて退官し、後任には文
 部省図書局長石井正純が就いた。しかし、石井は
 一九四三年九月三十日に第四高等学校校長として
 金沢に赴任したので、在職期間は短かい。その後
 を襲つたのは、海軍司政官大畑文七である。ただ、
 十一月一日に着任するまでの間は、井手義行教授

が校長事務取扱を務めた。その大畑は、東京外国語学校が東京外事専門学校に変わってから間もない一九四四年六月十日に、四国地方総監府第三部長となり、その後は再び井手が校長事務取扱を務めるが、同年七月十八日井手は校長に昇任し、そのまま終戦を迎えることになる。